

[報告]

献血車1稼働効率UPを図った啓発方法の改善

長野県赤十字血液センター

齊藤克広, 芦川志津子, 熊谷智子, 下沢みな子, 中山信幸, 横山敏之, 熊崎ちか子, 笹川正樹,
権藤悠一, 伊藤弘樹, 堀内忠美, 松嶋 寛, 村田近文, 小池敏幸, 佐藤博行

Kaizen activity to increase blood donors for mobile collections

Nagano Red Cross Blood Center

Katsuhiro Saito, Shizuko Ashikawa, Satoko Kumagai, Minako Shimoizawa,
Nobuyuki Nakayama, Toshiyuki Yokoyama, Chikako Kumazaki, Masaki Sasagawa,
Yuichi Gondo, Hiroki Ito, Tadami Horiuchi, Hiroshi Matsushima, Chikafumi Murata,
Toshiyuki Koike and Hiroyuki Sato

抄 録

関東甲信越ブロック血液センター献血推進部門は「9550」を目標に掲げ、400mL献血率95%、移動採血車1稼働献血協力者数50人の達成を目指している。長野県赤十字血液センター諏訪出張所においては、移動採血での400mL献血率については既に目標とする95%を達成できたことから、1稼働献血協力者数を上げることが第一の目標と位置付けている。

その対策として1稼働の会場数を増やさずに、献血協力者数を増加させる方策について課員とともに検討し、献血会場ごとに献血への関心を持っていただけの新しい情報提供方法で、協力団体担当者や協力団体職員、会場来訪者へ献血必要人数等の情報を伝えることとした。その結果、平成27年度1稼働献血協力者数41人に比べ、平成28年度42人、平成29年度44人へ献血協力者数を増やすことができたので報告する。

Key words: kaizen, notification, improvement

【はじめに】

諏訪出張所は移動採血車2台を保有し、年間稼働台数約400台にて採血業務を行っている。安全な血液を安定的に供給するため「400mL献血率の維持、1稼働献血協力者数の向上に努め効率的な採血に努める」ことを目標に掲げている。平成26年度以降は、「400mL献血限定」の献血会場数を増やしたことにより、400mL献血率については目標である95%を達成できたが、1稼働の献血協力者数は目標44人に対し41人と目標に届かな

かった。そこで、1稼働献血協力者数の向上には何をすべきかを課内で検討した結果、「医療機関は輸血用血液をどれだけ必要としているか？」を協力団体担当者と献血協力者に伝えられなかったことが問題点と考え、月度の採血計画本数を献血会場ごとに按分した本数を必要献血協力者数とし、これを如何に協力団体担当者や献血協力者に伝えることが大切かを課員全員で認識し、協力団体担当者や献血協力者に必要献血者数を明確に伝える方法を模索した。必要献血協力者数は前年度

の献血実績をもとに算出し、平成28年4月から「街頭」（ショッピングセンター等で来場者に対し協力を依頼している会場）、「地域」（県市町村庁舎等を会場に庁舎職員を中心に地域住民に対し協力を依頼している会場）、「職域」（企業の社員等に協力を依頼している会場）の各域区分において、有用と思われる啓発素材に当日の必要献血協力者数を明記して周知を図り、一稼動献血協力者数の向上に取り組んだ。今回、啓発手段に工夫を施した改善の取り組みに一定の結果を得たので紹介する。

【方 法】

1) 検証の場

毎月定例の課内会議で前月の諏訪出張所における稼働効率を検証。「移動採血車一稼動献血協力者数の向上を目指し、何をしたらよいか？」を話し合い、課員からの意見を求めた。

2) 企業担当者への献血協力予定者数の確認と必要献血協力者数の周知

改善前は献血協力予定者数を把握する目的のみで、献血協力企業（職域）に向けて「献血者予定者数確認FAX返信用紙」（図1左 改善前）を送付し、後日企業担当者が献血協力予定人数を把握できたところで返信または報告していただいた。改

善後は「献血者予定者数確認FAX返信用紙」に必要献血協力者数をセンター側で明記し送付することで企業側に血液の必要数を訴えることを行った。後日献血協力予定人数が把握できたところで返信または報告していただいた（図1中 改善後）（図1右 改善部拡大図）。その他のFAX返信用紙記載内容としては、献血に対する意見要望、アンケート（年間の献血回数を増やせるか、紹介していただける企業があるか、近隣の方の献血は可能か）を記載した。

3) 啓発用リーフレットの活用

改善前の訪問啓発用リーフレットは、ポスター仕様であり単に献血日、受付時間を知らせることが目的の全会場共通のものであったが（図2左 改善前）、改善後は必要献血協力者数の明記に併せ「キャンペーン内容」や「主催団体からの提供内容」「献血基準」を掲載した。併せて、会場にマッチした表現やデザインを用い会場ごとのオリジナル性¹⁾を持たせた（図2中 改善後）。社内掲示の他、社内回覧、社内メールで職場の方々に献血を呼び掛けていただいた（図2右 改善部拡大図）。

4) 献血実施前日確認

改善前は献血実施前日に受付時間、受付場所、バスの駐車スペースの最終確認を行っていたが、改善後は担当者に必要献血協力者数を伝え再度周

Figure 1 shows three versions of the 'FAX Return Form for Confirming the Number of Potential Blood Donors' (献血協力予定者数確認FAX返信用紙). The left version (改善前) is a standard form with fields for date, name, and company, and a section for reporting the number of potential donors. The middle version (改善後) adds a section for reporting the number of potential donors and includes a small cartoon character. The right version (改善部拡大) is a detailed view of the '献血実施日' (Blood Donation Day) section, showing fields for date, name, company, and contact information, along with a section for reporting the number of potential donors and a small cartoon character.

図1 献血協力予定者数確認FAX返信用紙(左改善前 中改善後 右改善部拡大)

知の依頼を行った。

5) 啓発用ポケットティッシュ配布

改善前は献血実施当日、地域(県市町村庁舎)や街頭献血において血液センター職員、ボランティアによる固定施設の案内入りポケットティッシュ(図3左)を配布しながら呼びかける広報活動を行っていたが、移動採血においては効果的ではなかったことから、改善後は当日の移動採血会場における必要献血協力者数が明記されたポケットティッシュを作成、さらにデザインを工夫し「心に響く」をテーマにキャッチコピーを盛り込み、絵柄

についてもオリジナル性を持たせ、必要献血協力者数を訴え配布を行った(図3右)。地域においては早朝職員の出勤に合わせ担当者と共に行った。

6) 職員間での当日必要献血協力者数の共有

移動採血班の責任者は移動中のバス内でミーティングを行い、現在の供給状況・赤血球製剤在庫状況、献血協力状況を報告。さらに、当日の必要献血協力者数を伝え情報を共有した。献血会場では、献血協力企業、団体担当者に現在の供給状況、必要献血協力者数を再度伝え献血協力者を募っ



図2 啓発用リーフレット(左改善前 中改善後 右改善部拡大)

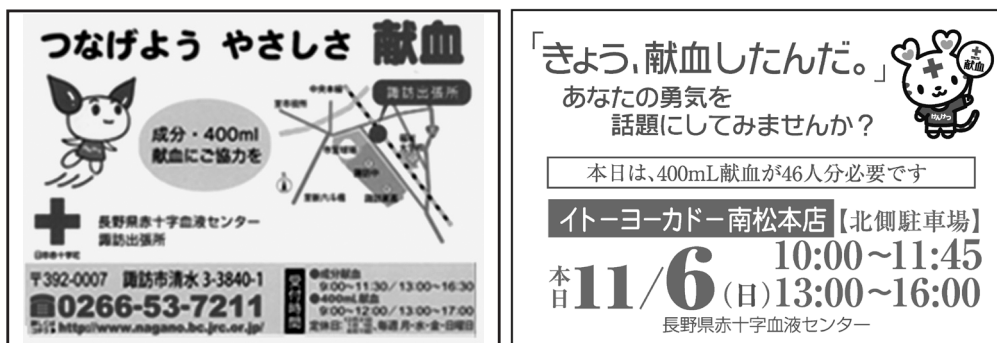


図3 ポケットティッシュ図柄(左改善前 右改善後)

た。

7) 館内放送, 社内メールでの周知

献血会場において館内放送や社内メール発信を依頼して受付場所, 受付時間の他に, 必要献血協力者数を盛り込み周知した。

8) 啓発用資材の活用

主に啓発用リーフレットは「地域」献血において事前回覧等に使用した。ポケットティッシュは「街頭」献血において使用し, 「献血者予定者数確認FAX返信用紙」は「職域」献血においてのみ使用することとした。使用する様式は異なるが最終的には「地域住民」「店舗来場者」「職域担当者」等確保協力のキーとなる方々に「当日の必要献血協力者数」が目に残ることを意識した。

9) 比較検定方法

「街頭」におけるポケットティッシュ配布, 「地域」における啓発用リーフレットの発信, 「職域」におけるFAX送信表の活用による効果を確認するため, 各域(街頭・職域・地域)別に, 平成27年度対平成28年度, 平成27年度対平成29年度の献血協力者数について比較検討を行った。検定方法は, t検定を用い有意水準0.05にて評価した。また, 平成29年4月から9月に実施した会場のなかで, 平成27年と平成28年の同時期に献血を実施した同一会場を比べるにあたり, 受付時間に違いがあるため, 1時間あたりの献血協力者数について比較を行った。

【結 果】

平成27年度の400mL献血率94.7%, 一稼働献血協力者数41人に比べ, 平成28年度は400mL献血率99.7%, 一稼働献血協力者数42人。平成29年度8月現在は, 400mL献血率を維持しつつ, 一稼働献血協力者数44人となった(図4)。また, 1時間あたりの献血協力者数について表1に示す。1時間あたりの献血協力者数は, 平成27年度に対し平成28年度と平成29年度を比較し, ポケットティッシュ配布を行った「街頭」(ショッピングセンター等)では, 1.2人増加し, 啓発用リーフレットの発信を行った「地域」(区市町村庁舎)では, 1.5人の増加を認め, それぞれ平成27年度に比べ平成29年度は有意性を認めた。また, 「献血

者予定者数確認用紙」を活用した「職域」においては0.3人の増加は認めたものの, 平成27年度に比べ平成28年度は有意性が認められなかったが, 平成28年度に比べ平成29年度は0.5人の増加があり有意性が認められた。

【考 察】

職域においては「献血者予定者数確認FAX返信用紙」に, 必要献血協力者数を明記した結果, 企業側から返信される献血協力予定者数との差が明確になり, 献血実施当日までの再依頼や折衝が行いやすくなった。平成28年度は, 担当者から「献血は善意の行動であってノルマを与えられるものではない」「必要献血協力者数が示されプレッシャーだ」, 「この人数を集めないと配車は不可能なのか」等の苦言も多くいただき, 献血協力者数に有意な増加は認められなかった。しかしながら, 引き続き血液製剤の供給状況, 献血協力状況を担当者に訴えてきたことで, 平成29年度以降には「近隣や関連企業に周知し確保に努める」「予定数に達しないが当日まで呼びかける」との前向きな意見をいただけるようになった。これまで漠然と献血協力者を募ってきた企業において, この改善により企業担当者の献血への取り組み姿勢を変え精神的に献血協力者確保のお願いをしたことが, 献血協力者数の増加に繋がったものと考えられた。「地域」, 「街頭」においては, 啓発用リーフレット, ポケットティッシュに必要献血協力者数の明記に併せ「きょう, 献血したんだ。～あなたの勇気を話題にしてみませんか～」など, 心に訴えるキャッチコピーを盛り込み, 絵柄についても会場ごとオリジナル性を持たせたことが献血について関心を持っていただくことに繋がり, 献血協力者を増やすために有効であったと思われる。

血液センターの推進担当職員においては, 関係職員に対して毎月の需給計画に基づき必要献血協力者数が算出されていることを伝え, さらにこれを受けて日々献血会場ごとの必要献血協力者数を算出し, 現在の供給状況についても情報共有することとした。また, 献血実施当日の献血会場では, 情報共有した採血班の職員が献血協力企業, 団体担当者, および献血者に血液の必要性につい

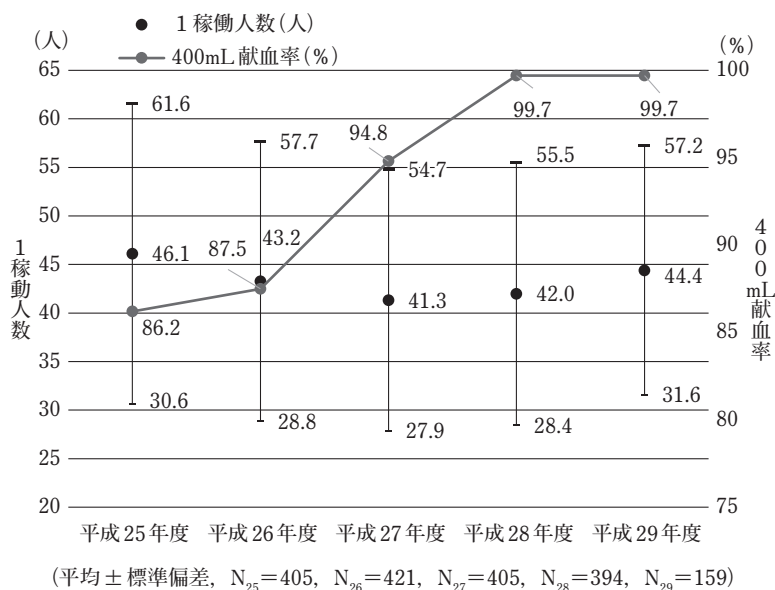


図 4 400mL 献血率・1 稼働人数

表 1 会場 1 時間当たりの献血者数(単位:人)

献血会場	会場数 (同時期)	1 時間当たりの人数		
		平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
街頭	19	9.1	9.8	10.3 *
職域	200	10.7	10.5	11.0 **
地域	10	10.5	11.2	12.0 *

* : 27 年度に比較して有意に増加 ($P < 0.05$)** : 28 年度に比較して有意に増加 ($P < 0.05$)

て伝えていくことを徹底した。採血班職員が必要献血協力者数を認識することにより、献血協力人数の増加に向かったのモチベーションが上がり、意識の改革²⁾が行えた。その結果、血液センターからの意向がより団体担当者に認識され一稼働献血協力者数を向上させたと考える。

今後さらなる一稼働献血協力者数を上げることが課題であり、目標である一稼働献血協力者数 50 人が達成できれば配車台数の削減になり職員のゆとりにも繋がると考えられる。

文 献

- 1) 湯川昇ほか：企業献血および献血ルームでの 400mL 献血者確保方策について、血液事業、31：216, 2008

- 2) 松坂俊光：少子高齢化に伴う献血血液の相対的不足に対する方策について、日本輸血細胞治療学会誌、59(6)：826-831, 2013